

閉会の辞

欧米言語文化学会相談役 野村 忠央

相談役の野村忠央でございます。ご指名ということで、閉会の辞として一言ご挨拶申し上げます。この5年間の例大会、学会の状況を一関西支部の状況は、先週木曜日に例会が京都先端科学大学太秦キャンパスで開催されました。本日、お見えの江藤あさじ先生のご報告にお任せすることとして一振り返りますと、令和が始まった2019年9月の第11回年次大会は今大会と同じ日本大学芸術学部江古田校舎西棟W-303教室で開催され、本会に多大の貢献があった元副編集長の大石健太郎先生もお元気でシンポジウムの司会やご発表をされていました。しかし、2020年2月頃から突然、新型コロナウィルス感染症の世界が押し寄せ、その年3月の例会、9月の年次大会は延期という苦渋の選択を迫られ、お元気だった大石先生も85歳で亡くなられていたという悲しい知らせを受けました。

コロナ禍の世界の苦労、授業運営は我々みんなが共通しておりますので記すまでもありませんが、本会も慣れないZoom開催に舵を切り、2021年3月に延期していた第12回年次大会を初めてZoom開催で実施しました。当時の例大会運営委員会の先生方のご苦労、ご尽力に改めて感謝申し上げます。その後も2021年9月の第13回年次大会、続く2022年9月の第14回年次大会など、Zoom開催が継続しますが、その間、多大な困難を乗り越え、2021年12月に30周年記念出版『多次元のトピカ』が636ページという大著として贊助会員の金星堂よりめでたく刊行されました。植月恵一郎先生、奥井裕先生を正副編集委員長として、私も編集副委員長を務めましたが、コロナ禍でのあの時のつくづくの苦労はやれと言われてももう二度と繰り返せないと思います。

そして、ようやく対面とZoomのハイブリッド開催に踏み切れたのが2023年3月の春の例会からでした。その頃から2023年9月の第15回年次大会、2024年9月の第16回年次大会など、例大会開催で何度も日本大学三軒茶屋キャンパスにお世話になるようになりました。ハイブリッド開催では複数のマイク使用など、事前にリハーサルも実施することとなり、例大会運営委員の先生方や開催校の工藤由布子先生には文字通り、多大のご足労をお掛けしました。Zoom画面の向こうでリハーサルに奔走している上滝先生、藤原(雅)先生、関田先生、植月先生、奥井先生、森景先生、工藤先生の姿をいつも拝見していました気がします。(ここに抜け落ちている先生がおられましたら何卒ご寛恕下さい。)

そして、とうとう本年2025年3月の春の例会、今回9月の第17回年次大会を以て、本学日本大学芸術学部江古田校舎で対面開催のみの開催に戻った次第です。上滝圭介委員長、藤原雅子副委員長をはじめとした例大会運営委員会の先生方、植月恵一郎先生をはじめとした開催校日本大学芸術学部の先生方に改めて感謝申し上げます。

本日の大会ではバランス良く 3 分野の発表があり、文学分野ではベテランの山木聖史先生、加藤良浩先生の興味深いご発表がございました。また、英語学、英語教育学分野ではお若い北島翔汰先生と野村の連続シンポジウムの発表がございました。連続シンポジウム「学問的知見を英語教育に活かす」はその成果を 2019 年 9 月に金星堂より同名書籍として世に問いましたが、その後も途切れることなく、十数年に亘り、今回、発題者 25 まで継続しております。

最後に、他学会が軒並み会員減に苦しんでいる中、本会は有難いことながら会員の微増が続き、8 月の奥井事務局長のご報告では 105 名の会員数に及んだとのことでございます。しかし、そうは言っても苦しい学界状況、学会運営が続いております。今後も欧米の言語と文化を広く扱う本会の伝統の灯が消えることなく続くことを願い、閉会の辞に代えさせて頂きます。また、末筆ながら、この場を借りまして、7 月に 49 歳の若さでお亡くなりになった元日本大学危機管理学部危機管理学科専任講師の工藤由布子先生に哀悼の意を表します。本日はありがとうございました。

令和 7 (2025) 年 9 月 7 日 (日)